山家集

94
143

覆刻叢書

第二卷

一覆刻叢書は有用なる古書を覆刻す

一覆刻叢書は時に從つて材を擇ふ

一覆刻叢書は植字の正確を期すると

共に躰裁の簡潔を尙ふ

凡例

一傳云西行嘗て歌集を自撰し、之を禪僧周嗣なるものに與へたるを、法勝寺火災之折燒失したりしが、後周嗣舊の如く寫して世に傳へたりと。是山家集の原本にして、後世又數種の刊本有り。今行はる、六家集本、類題本、等即夫れにして、別に西行法師家集なる古本有りと雖も、誤謬用ふるに足らずといふ。

一本書初め類題本を採らんとせしも、浩翰に失するの嫌有りて、寧六家集本の要を得たるに若かざるを思ひ、すべて之に據ること、せり。

一原本の校訂は、すべて佐々木信綱氏を煩はしゝも、印刷の校正は編者自ら之に當りたり。特に記して其責を明にす。

一別載跋文又佐々木氏の特に起稿を忝ふせし所にして、猶同氏は編者の爲め懇切なる注意を與へられぬ。謹而茲に其高意を鳴謝す。

癸卯仲夏　　編者

山家集上

佐々木信綱校訂

春

立春の朝よみける

年くれぬ春來べしとい思ひ寐にまさしく見えてかなふ初夢

山の端の霞むけしきにさるさかな今朝より

やさゝはるの曙

春たつとおもひもあへぬ朝戸出にいつしか

霞む音羽山かな

たちかはる春をきれとも見せがほに年をへ

だつる霞也けり

とけ初るはつ若水の氣色にて春たつことの

くまれぬるかな

家々に春を祝ふといふことを

門毎にたつる小松にかざされてやどてふ宿

に春ゝ來にけり

元日子日にて侍りけるに

子日して立てたる松に植そへん千代重ぬべ

き年のきるしに

山里に春たつといふことを

山里ゝかすみわたれる氣色にて空にや春の

たつを知るらむ

難波わたりに年越に侍りけるに春たつ心をよみけ

る

いつしかも春來にけりと津の國の難波のう

らを霞こめたり

春になりける方たがへに志賀の里へまかりける人

に具してまかりけるに逢坂山の霞みたりけるを見

て

わきてけふ逢坂山の霞めるゝへたちおくれた

る春やこゆらむ

春來て猶雪

かすめども春をべよその空に見てとけぬと
もなき雪の下水

題しらず

春知れと谷の下水もりぞ來る岩間のこほり
ひまたえゝけり
かすまずゝ何をか春とおもへましまだ雪消
えぬみ吉野の山

海邊の霞といふことを

藻鹽やく浦のあたりへ立のかでけぶりあら
そふ春がすみ哉

おなじ心を伊勢に二見といふ所にて

波こすと二見の松の見えつるへ梢にかゝる
かすみなりけり

子日

春毎に野べの小松を引く人へ幾らの千代を
ふべきなるらむ
子日する人に霞へさきだちて小松がはらを
たなびきにけり
子日ゝに霞たなびく野べに出て初うぐひす
の聲をきくかな

若菜に初子のあひたりけれバ人の許へ申し遣しける

わか菜つむ今日は初子のあひぬれば松にや人の心ひくらむ

雪中若菜

今日はたゞ思ひもよらで歸りなん雪つむ野べの若菜也けり

若菜

春日野は年の内には雪つみて春はわか菜の生ふるなりけり

雪中若菜

春雨のふる野の若菜生ぬらしぬれ〳〵摘んかたみ手ぬきれ

若菜によせてふるきを思ふといふ事を

若菜つむ野邊の霞ぞあはれなる昔を遠くへだつとおもへば

老人の若菜といへる事を

卯杖つき七草にこそ出にけれ年をかさねてつめるわか菜は

寄若菜述懷といふことを

若菜生ふる春の野守に我なりて憂世を人につみ知らせばや

驚によせて思を述べけるに

うき身にて聞くもをしきはうぐひすの霞にうき身にて聞くもをしきはうぐひすの霞に

むせぶ明ぼのゝ聲

閑中鶯といふことを

うぐひすのこゑぞ霞にもれて來る人めとも
しきはるの山里

雨中鶯

鶯の春さめ〳〵となきゐたる竹のまづくや
あみだなるらむ

すみける谷に鶯の聲せずなりにければ

古巣うとく谷の鶯ありはてゝ外やかはりて
なかんとすらむ
鶯ゝ谷のふるすをいでぬともわが行へをゞ

わをれざらなむ
鶯ゝわれをそもりにたのみてや谷の外へゝ
いでゝゆくらむ
春のほどゝわが住む庵の友になりてふる巣
ないでそ谷の鶯

きゞすを

もえ出る若菜あさると聞ゆなりきゞすなく
野の春の明ぼの
生かはる春の若くさまちわびて原のかれ野
にきゞす鳴なり
片岡に芝うつりして鳴きゞす立つ羽音とて

たかゝらぬかゝ

春霞いづら立出てゆきにけん雉子住む野をやきてけるかな

梅を

香にぞまづ心ときめおく梅の花色はあだにもちりぬべければ

山里の梅といふ事を

香をとめん人をこそ待て山里の垣ねの梅のちらぬかぎりゝ

心せむまづが垣ほの梅ゝあやなよしなく過る人とゞめけり

この春は賤が垣ほにふれわびて梅が香とめん人ときたしまじ

蟻蛾に住けるに道をへだてゝ坊の侍りけるより梅の風にちりけるを

ぬしいかに風わたるとていとふらむよそにぬしいかに風わたるとていとふらむよそに

嬉しき梅の匂を

庵の前なりける梅を見てよめる

梅が香を山ふところに吹ためていり來ん人にときめよ春かぜ

伊勢のにしふく山と申す所に侍りけるに庵の梅かうばしく匂ひけるを

柴の庵によるく梅の匂ひ來てやさしき方
もあるをまひ哉

梅に鶯のなきけるを

梅が香にたぐへてきけば鶯のこゑなつかし
き春のやまざと

つくり置し梅のふすまに鶯ゝ身にまむ梅の
香やうつすらむ

旅のとまりの梅

ひとりぬる草の枕のうつり香ゝ垣ねの梅の
にほひなりけり

ふるき砌の梅

何となく軒なつかしき梅ゆゑに住けむ人の
こゝろをぞ知る

山里の春雨といふ事を大原にて人々よみけるに

春雨の軒たれこむるつれく に人に知られ
ぬ人のすみかか

霞中歸雁といふことを

何となくおぼつかなきゝ天のはら霞に消え
てかへる雁がね

かりがねゝかへるみちにやまどふらむ越の
中山霞へだてゝ

歸雁

玉章のはしがきかとも見ゆる哉とびおくれつゝ歸る雁がね

山家呼子鳥

山里に誰を又こゝよぶこ鳥ひとりのみこそすまんと思ふに

苗代

苗代の水を霞いたなびきてうちひのうへにかくるなりけり

霞に月の曇れるを見て

雲なくておぼろなりとも見ゆるかな霞かゝる春の夜の月

山里の柳

山がつのかた岡かけてまむる庵のさかひにたてる玉の小柳

柳風にみだる

見渡せばさほの川原にくりかけて風によらるゝ青柳のいと

雨中柳

なか〳〵に風のおそにぞ亂れける雨にぬれたる青柳のいと

水邊柳

みなそこにふかきみどりの色見えて風になな

みよる河柳かな

待花忘他といふ事を

まつによりちらぬ心を山櫻さきあべはなの
おもひ知らなむ

獨山の花を尋ぬといふ事を

たれかまた花をたづねて吉野山苔ふみわく
る岩つたふらむ

花を待つ心を

今更に春を忘るゝ花もあらじやすく待ちつ
ゝ今日も暮さむ
おぼつかないづれの山の嶺よりか待るゝ花

の咲はじむらむ

花の歌あまたよみけるに

空に出ていづくともなく尋ぬれば雲とゝ花
の見ゆる也けり
雪とぢし谷のふる巣を思ひ出て花にむつる
ゝうぐひすの聲
吉野山雲をはかりに尋ね入てこゝろにかけ
し花を見るかな
思ひやるこゝろや花にゆかざらむ霞こめた
るみよし野の山
おしなべて花の盛になりにけり山のはごと

にかゝるまら雲
まがふ色に花咲ぬれべよし野山春へはれせ
ぬみねのまら雲
よし野山梢のはなを見し日より心へ身にも
そはずなりにき
あくがるゝ心へさてもやまざくら散なん後
や身に歸るべき
花見れべそのいはれとへなけれども心の内
ぞ苦しかりける
白川の梢を見てぞあぐさむるよし野の山に
かよふこゝろを

引かへて花見る春へ夜へなく月見るあきへ
ひるなからなむ
花ちらで月へくもらぬ世なりせべ物を思は
ぬ我身ならまし
たぐひなき花をし枝に咲すれべ櫻にならふ
木ぞなかりける
身を分て見ぬ梢あくつくさばやよろづの山
の花のさかりを
櫻さく四方の山べをかぬるまにのどかに花
を見ぬ心地する
花にそむ心のいかでのこりけむそてはてて

きと思ふ我身に
白川の春の梢のうぐひすゝはなのことばを
きくこゝちする
願はくゝ花の下にて春死なむそのきさらぎ
のもち月のころ
佛にゝさくらの花をたてまつれわが後の世
を人とふらゝゞ
何とかや世にあり難き名を得たる花に櫻に
まさりしもせじ
山ざくら霞のころもあつく着てこの春だに
も風つゝまなむ

思ひやる高根の雲の花ならゞちらぬ七日ゝ
晴じとぞ思ふ
長閑なる心をさへにすぐしつゝ花ゆゑにこ
そ春をまちしか
風こしの嶺のうゞきに咲く花ゝいつ盛とも
なくやちるらむ
ならひありて風さそふとも山櫻尋ぬる我を
待ちつけて散れ
すそ野やく煙ぞ春ゝよし野山花をへだつる
かすみなりける
今よりゝ花見ん人につたへおかむ世を遁れ

つゝ山に住むと

閑ならんと思ひける頃花見に人々のまうで來けれ

花見にとむれつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎にハ有ける

花もちり人も來ざらんをりハ、又山のかひにて長閑なるべし

かき絶えことゝとはずなりにける人の花見に山里へまうで來たりと聞てよみける

としをへておなじ梢に匂へども花こそ人にあかれざりけれ

花の下にて月を見てよみける

雲にまがふ花の下にてながむれバ朧に月ハ見ゆるなりけり

春の明ぼの花見けるに鶯のなきけれバ

花の色やこゝにそむらむ鶯のなく音ことなる春のあけぼの

春ハ花を友といふ事なせがゐの齊院にて人々よみけるに

おのづから花なき年の春もあらバ何につけてか日を暮さまし

老見花といふこゝろを

老づとに何をかせまし此春の花まちつけぬ
わが身なりせば

老木の櫻の所々に咲たるを見て

わきて見ん老木へ花もあはれなりいま幾度
か春にあふべき

屏風の絵を人々よみけるゝ春の宮人むれて花見ける
る所ゝよそなる人の見やりてたてりけるを

木のもとへ見る人をげし櫻花よそにながめ
て我へをしまむ

山寺の花さかりなりけるに昔を思ひ出て

よし野山ほき路づたひに尋ね入て花見し春

へ一むかしかも

修行し侍るゝ花おもしろかりける所にて

ながむるに花の名立の身ならずへこの本に
てや春を暮さむ

熊野へ參りけるに八上の王子の花おもしろかりけ
れば社にかきつけゝる

待來つるやかみの櫻咲ゝけり荒らくおろす
なみすの山かぜ

せか院の花盛なりける頃としたゞがいひ送りける

おのづから來る人あらば諸共にながめまほ
しき山ざくら哉

かへし

ながむてふ數に入るべき身なりせば君が宿にて春へへあまし

上西門院女房法勝寺の花見られけるよ雨のふりて暮にけれバ歸られにけり又の日兵衛の局のもとへ花の御幸思ひ出させ給ふらんと覺えてかくなん申さまほしかりしとて遣はしける

見る人に花も昔を思ひ出てこひしかるべしあめにぬるゝ

かへし

いにしへを忍ぶる雨と誰か見ん花もその世

の友しなければ

若き人々ばかりなん老にける身へ風の煩しきにいとはるゝ事にてと有けるなんやさしくきこえける

雨のふりけるに花の下に車をたてゝながめける人に

ぬるともと蔭を頼みて思ひけむ人の跡ふむ今日ぞもある哉

世をのがれて東山に侍る頃白川の花盛に人さそひけれバまかり歸りけるに昔思ひ出て

ちるを見てかへる心や櫻花むかしにかはるぬるしなるらむ

山路落花

ちり初る花の初雪ふりぬれゞふみわけまう
き志賀の山ごえ

落花の歌あまたよみけるに

勅とかやくだを御門のいませかしさらゞ恐
れて花やちらぬと
浪もゆく風ををさめし白川の君のをりもや
はなゝちりけむ
いかでわれ此世の外の思ひ出に風をいとは
で花をながめむ
年をへてまちもをらんと山櫻こゝろを春ゝ

つくすなりけり
よし野山たにへたなびく白雲ゝ嶺の櫻のち
るにやあるらむ
吉野山嶺なる花ゝいづかたも谷にかわきて
ちりつもるらむ
山おろしの木のもと埋む花の雪ゝ岩井にう
くも氷とぞ見る
春風の花のふゞきにうづもれて行もやられ
ぬ志賀のやま道
立まがふ嶺の雲をゞ拂ふとも花をちらさぬ
あらしなりせゞ

吉野山花ふき具して峰こゆるあらしハ雲と
よそに見ゆらむ
惜まれぬ身だにも世にハある物をあなあや
にくの花の心や
うき世にハとゞめおかじと春風の散すハ花
を惜むなりけり
諸共に我をも具してちりぬ花うき世を厭ふ
こゝろある身ぞ
思へたゞ花のあからむ木のもとに何をかげ
にて我身住みなむ
ながむとて花にもいたく馴ぬれバちる別こ

そ悲しかりけれ
惜めバと思ひげもなくあだにちる花ハ心ぞ
かしこかりける
こずゑふく風の心ハいかゞせむ春たがふ花
の恨めしきかな
いかでかハちらでありとも思ふべきさばし
と慕ふ情ぞ花
木のもとの花に今宵ハうづもれてあかぬ梢
を思ひあかさむ
木のもとの旅ねをすれバ吉野山花のふすま
を着する春かぜ

雪と見えてかげに櫻のみだるれば花のかさ
着る春の夜の月
ちる花を惜む心やとゞまりてまた來む春の
たれになるべき
春ふかみ枝も動かでちる花ハ風のとがにハ
あらぬなるべし
あながちに庭をさへ吹く風哉さこそこゝろ
に花をまかせめ
あだにちるさこそ梢の花ならめをこしハの
こせ春のやま風
心得つたゞひとすぢにいまよりハ花を惜ま

て風をいとはむ
よし野山櫻にまがふ白雲のちりなん後ハは
れずもあらなむ
花と見ばさすが情をかけましを雲とて風の
はらふなるべし
風さそふ花の行方ハ知らねどもをしむ心ハ
身にとまりけり
花ざかり梢をさそふ風ならでのどかにちら
む春ハあらばや

庭の花波に似たりといふ事をよみけるに

風あらみこずゑの花のながれ來て庭になみ

たつ白河のさと

白川の花庭面白かりけるを見て

あだにちる梢の花をながむれゞ庭にゝ消え
ぬ雪ぞつもれる

高野にこもりたりける頃草の庵に花のちりつみけれゞ

ちる花の庵の上をふくならゞ風いるまじく
めぐりかこはむ

夢中落花といふことを前齋院にて人々よみけるに

春風の花をちらすと見る夢ゝさめても胸の
さわぐなりけり

風の前の落花といふ事を

山櫻枝きるかぜのなごりなく花をさながら
わがものにする

雨中落花

梢うつ雨に去をれてちる花のをしきこゝろ
を何にたとへむ

遠山殘花

よし野山一むら見ゆる白雲ゝ咲おくれたる
さくらおるべし

花の歌十五首よみけるに

よし野山人に心をつけがほに花よりさきに

かゝるまらくも
山寒み花咲くべくもあかりけり餘りかねて
も尋ね來にけり
かたばかりつぼむと花を思ふよりそらまた
心物になるらむ
おぼつかな谷ゝ櫻のいかならむ峰にゝいま
だかげぬまら雲
花と聞くゝ誰もさこそゝ嬉しけれおもひま
づめぬ我心かな
初花のひらけはじむる梢よりそばえて風の
わたるかな

おぼつかな春ゝ心の花にのみいづれの年か
うかれそめけむ
いざ今年ちれと櫻をかたらはむ中々さらば
かぜやをしむと
風ふくと枝をはなれておつまじく花とぢつ
けよ青柳のいと
吹く風のあべて梢にあたる哉かばかり人の
をしむさくらを
なにとかくあだなる花の色をしも心に深く
そめはじめけむ
おなじ身の珍しからず惜めばや花もかはら

ず咲けばちるらむ

嶺にちる花ハ谷なる木にぞさくいたくいと
はじ春の山かぜ

山おろしに亂れて花のちりけるを岩離れた
る瀧とみたれば

花もちり人も都へかへりなば山さびしくや
ならむとそらむ

散りて後花を思ふといふ事を

青葉さへ見れば心のとまる哉ちりにし花の
なごりと思へば

跡たえてあさぢまげれる庭の面にたれ分い
りて菫摘みけむ

たれおらむ荒田のくろに菫つむひとハ心の
わりおかりけり

さわらび

なほざりに燒き捨し野のさ蕨ハ折る人なく
てほどろとやなる

かきつばた

沼水にさげる眞菰のわかれぬを咲へだてた
るかきつばた哉

はひつたひをらて躑躅を手よぞとる嶮しき
山のとり所にゐ

つゝじ山のひかりたりといふことを

躑躅さく山の岩陰夕ばえてをぐらゐよその
名のみなりけり

やまぶき

岸ちかみうゑけん人ぞうらめしき波にをら
るゝ山ぶきの花

山吹の花さく里になりぬれバこゝよも井手
とおもほゆる哉

蛙

真菅生ふる山田に水をまかすれバうれし顔
よもなく蛙かな

みさびゐて月も宿らぬにごり江よ我すまん
とて蛙なくなり

春のうちに郭公をきくといふ事を

うれしとも思ひぞわかぬ郭公春きくことの
ならひなけれバ

伊勢にまかりたりけるにみつと申す所にて海邊の
春の暮といふことを神主どもよみけるに

過る春潮のみつより舟出して波のはなをや
さきにたつらむ

三月一日たらて暮けるによみける

春故にせめても物を思へとやみそかにだに
もたらで暮ぬる

三月のつごもりに

今日のみと思へゞ長き春の日も程なく暮る
丶心地こそすれ

行く春をとゞめかねぬる夕暮へ明ぼのより
もあはれなりけり

夏

限あれゞ衣ばかりをぬぎかへて心へはなを
おたふなりけり

夏の歌よみけるに

草おげる道かりあけて山里に花見しひとの
こゝろをぞ見る

水辺卯花

たつ田川岸の籬を見わたせゞゐせぎの波に
まがふ卯のはな

山川の波にまがへるうの花をたちかへりて

や人へをるらむ

夜卯花

まがふべき月なき頃の卯の花へ夜さへさらす布かとぞ見る

社頭卯花

神垣のあたりにさくも便あれや木綿かけたりと見ゆる卯花

無官なりける頃郭公の初聲をきゝて

時鳥人にかたらぬをりにしも初音きくこそかひなかりけれ

不尋問子規といふ事を賀茂社にて人々よみけるに

時鳥卯月のいみにねこもるを思ひ知りても來なくなるかな

夕暮郭公といふことを

ことあるゝたそがれ時の郭公きかずがほにて又なのらせむ

郭公

我宿に花たちばなをうゑてこそ山ほとゝぎす待べかりけれ

尋ぬれば聞がたきかと時鳥こよひばかりゝまちこゝろみむ

時鳥まつ心のみつくさせてこえをゞをしむ

さつきありけり

人にかはりて

まつひとの心を志らバ郭公たのもしくてや
夜をあかさまし

時鳥なまちて明ぬといふ事を

郭公なかで明ぬとつげがほにまたれぬ鳥の
音ぞきこゆなる

郭公きかであけぬるなつの夜のうら志まの
子ハ誠なりけり

時鳥の歌五首よみけるに

郭公きかぬ物ゆゑまよはまし花をたづぬる

やま路なりせバ
待つことハはつ音までかと思ひしにきゝふ
るされぬ時鳥哉
きゝおくる心を具して郭公たかまのやまの
みねこえぬなり
大井川をぐらのやまの郭公ゐせぎにこゑの
とまらましかバ
郭公そのちこえん山路にもかたらぬ磐ハ
かはらざらむ

時鳥を

郭公きくをりにこそ夏山のあを葉ハはなに

おとらざりけれ

時鳥おもひもわかぬひと聲をきゝつといが

ゞ人にかたらむ

時鳥いかばかりなるちぎりにて心つくさて

ひとのきくらむ

かたらひしそのよの聲ゝ時鳥いかなるよに

もわすれん物か

時鳥はあたちばなゝにほふとも身をうの花

の垣根わするな

雨の中に郭公を待つといふ事をよみけるに

時鳥きのふ卯月もすぎにしをあほ聲をしむ

さみだれのそら

雨中郭公

さみだれのはれまも見えぬ雲路より山郭公

なきて過ぐあり

山寺の郭公といふことを人々よみけるよ

郭公きゝにとてしもこもらねど初瀬の山ゝ

たよりありけり

五月の晦日に山里にまかりて立歸りにけるを時鳥

もすげなく聞捨て歸りし事など人の申し遣しける

返事に

郭公あごりあらせて歸りしがきゝそつるに

もなりにける哉

題しらず

空晴てぬまのみかさを落さずゞ菖蒲もふかぬ五月おるべし

さることありて人の申し遣しける返事に五日

折にあひて人に我身や引れましつくまの沼の菖蒲なりせゞ

高野に中院と申す所よ菖蒲ふきたる坊の侍りける

に櫻のちりけるが珍しくおぼえてよみける

櫻ちる宿にかさなるあやめをゞ花あやめとやいふべかるらむ

ちる花を今日の菖蒲のねにかけて藥玉ともやいふべかるらむ

五月五日山寺へ人の今日いる物なれゞとて菖蒲をつかはしたりける返事よ

西にのみ心ぞかゝるあやめ草この世へ假のやどゝおもへゞ

皆人の心のうきへあやめ草にしにおもひのひかぬなりけり

五月雨の軒のきづくに玉かけてやどをかざれる菖蒲草かな

五月雨

水たゝふ入江の眞菰かりかねてむなてにす
つる五月雨の頃

五月雨に水まさるらし宇治橋やくもてにか
ゝる波のあら糸

こざゝしく古里小野の道のあとを又澤にな
そさみだれの頃

つく〳〵と軒の雫をながめつゝ日をのみく
らす五月雨の頃

五月雨は岩せく沼の水ふかみわけし岩間の
かよひ路もおし

東屋のをがやが軒のいと水に玉ぬきかくる

さみだれのころ

五月雨よ小田のさ苗やいかならむあぜの泥
土洗ひこされて

五月雨の頃にしおれば荒小田に人よまかせ
ぬ水たゝひけり

ある所にて五月雨の歌十五首よみ侍りし人にかはりて

五月雨にほすひまなくてもしほ草煙もたて
ぬうらの海士人

五月雨いさら小川の橋もおしいづくとも
なくみをに流れて

水無瀬川をちの通ひ路水みちて舟わたりす
るさみだれの頃
ひろ瀬川渡の沖のみをつくし水かさそふら
しさみだれの頃
早瀬川つなでの岸を沖に見てのぼりわづら
ふさみだれの頃
水分る難波堀江のかりせばいかにかせま
しさみだれの頃
舟とめしみなとの芦間さをたえて心行みん
さみだれのころ
水底にあかれにけりあさみだれて水の眞菰

を狩に來たれば
五月雨のをやむ晴まのなからめや水のかさ
ほせ眞菰かり舟
五月雨にさのゝ舟橋うきぬれぬのりてぞ人
ゝさし渡るらむ
五月雨の晴ぬ日數のふるまゝに沼の眞菰ゝ
水がくれにけり
水なしときゝてふりにし勝間田の池あらた
むる五月雨の頃
五月雨ゝ行べき道のあてもなしをざさが原
もらき流れつゝ

五月雨ハ山田のあぜの瀧枕かずをかさねて
落つるなりけり

河わたのよどみにとまる流木のうき橋わた
す五月雨のころ

思はずにあなづりにくき小川かな五月の雨
に水まさりつゝ

隣の泉

風をのみ花なき宿ハまち〳〵ていづみのす
ゑを又むすぶ哉

水辺納涼といふ事を北白川にてよみける

水の音に暑さ忘るゝまとゐ哉こずゑの蟬の

こゑもまぎれて

深山水鶏

杣人の菴にやどかる心地していほりをたゝ
く水雞なりけり

題志らず

夏山のゆふ志た風の涼しさに楢の木かげの
たゝまうきかな

撫子

かき分て折れば露こそこぼれけれ淺茅にま
じる撫子のはな

雨中撫子といふことを

露おもみ園の撫子いかならんあらく見えつ
るゆふだちの空

夏野の草かよみける

みまくさに原の小薄まがふとてふしどあせ
ぬと鹿おもふらむ

旅行草深といふ事を

旅人のわくる夏野の草まげみ葉ずゑにすげ
の小笠はつれて

行路夏といふことを

雲雀あがる大野の茅原夏來れゞ涼む木陰を
ねがひてぞ行く

ともし

照射する火串の松もかへなくにまかめあは
せで明す夏の夜

題しらず

夏の夜はまのゝ小竹のふし近みそよや程な
く明るなりけり

夏の夜の月見ることやなかるらむ蚊遣火た
つる賤の伏屋ゝ

海辺夏月

露のぼる芦のわか葉に月さえて秋をあらそ
ふ難波江のうら

泉にむかひて月を見るといふ事を

結びあぐる泉にすめる月かげゝ手にもとら
れぬ鏡ありけり

結ぶ手に涼しき影をそふるかな清水にやど
るなつの夜の月

夏の月の歌よみけるに

夏の夜も小笹が原に霜ぞおく月のひかりの
さえしわたれば

山川の岩にせかれてちる波をあられとぞ見
る夏の夜のつき

池上夏月といふことを

影さえて月しも殊にすみぬれば夏の池にも
つらゝねにけり

蓮池に涼りといふ事を

おのづから月宿るべきひまもなく池に蓮の
はなさきにけり

雨中夏月

夕立のはるれば月ぞやどりける玉ゆりすら
る蓮のうき葉よ

涼風如秋

まだきより身にしむ風のけしき哉秋さきだ
つるみ山べの里

松風如秋といふことを北白川なる所にて人々よみしに又水聲秋ありといふ事をかさねけるに

まつ風の音のみ何かいはばしる水にも秋へありけるものを

山家待秋といふことを

山里へ外面のまくず葉をあげみうら吹かへす秋をまつかな

六月秡

御秡してぬさとり流す河の瀬にやがて秋めく風ぞすゞしき

秋

山里のはじめの秋といふ事を

さまゝのあはれをこめて梢ふく風に秋知るみやまべの里

山居のはじめの秋といふ事を

秋たつと人へ告げねど知られけりみ山の裾の風のけしきよ

常磐の里よて初秋月といふ事を人々よみけるに

秋たつとおもふに空もたゞならでわれて光をわけむ三日月

初秋の頃鳴尾と申す所にて松風の音をきゝて

常よりも秋になるをの松風ゝわきて身に沁む心地こそすれ

七夕

いそぎ起て庭の小草の露ふまんやさしきかずに人や思ふと

暮ぬめり今日待つけて棚機ゝうれしきにも

や露こぼるらむ

天の河けふの七日ゝ長きよのためしよもひくいみもきつべし

舟よする天の川べの夕ぐれゝすゞしき風や

ふきわたるらむ

待つけてうれしかるらむ棚機の心のうちぞそらに知らるゝ

蜘のいかきたるを見て

さゝがにのくもでにかけて引く糸や今日棚機にかさゝぎの橋

草花道を遮るといふ事を

夕露をはらへゞ袖に玉消えてみちわけかぬる小野の萩はら

野徑秋風

末葉ふく風ゝ野もせに渡るともあらくゝわ

けじ萩の去た露

草花時を得たりといふことを

糸すゝきぬはれて鹿のふす野邊にほころび
やすき藤袴かな

行路草花

折らでゆく袖にも露ぞこぼれける萩の葉去
げき野べの細道

霧中草花

ほに出るみ山がすそのむら薄まがきにこめ
てかこふ秋ぎり

終日野の花を見るといふ事を

亂れさく野邊の萩原わけくれて露にも袖を
そめてけるかな

萩野に滿り

咲そはん所の野邊よあらべやゝ萩よりほか
の花も見るべく

萩野の家にみてりといふ事を

分て出る庭しもやがて野べなれば萩のさか
りを我物に見る

野萩似錦といふ事を

けふぞ知るその江にあらふ唐錦萩さく野べ
にありける物を

草花をよみける

おげりゆくおばの下草おはれ出て招くや誰を慕ふなるらむ

薄道にあたりておげしといふ事を

花薄心あてにぞわけてゆくほの見しみちのあとしなければ

古籬菊莟

離れて薄ならねどかるかやもおげき野べとへ成ける物を

女郎花

女郎花わけつる袖と思はゞやおなじ露にもぬると知れゝば

女郎花いろめく野べよぶれはらふ袂に露やこぼれかゝると

草花露重

今朝見れば露のすがるよ折ふして起もあがらぬ女郎花かな

大方の野べの露にゝおをるれど我おみだなきをみなへし哉

女郎花帶露といふ事を

花の枝に露の白玉ぬきかけて折る袖ぬらををみなへしかな

折らぬより袖ぞぬれける女郎花露結ぼれて
たてるけしきに

水邊女郎花といふ事を

池の面に影をさやかにうつしもて水鏡見る
をみなへしかな

たぐひなき花のそがたを女郎花池のかゞみ
に寫してぞ見る

女郎花水に近しといふ事を

女郎花池のさ波に枝ひぢてものおもふ袖の
ぬるゝがほなる

思ふにもすぎて哀にきこゆるゝ荻の葉みだ
る秋のゆふかぜ

おしなべて木草の末の原迄もなびきて秋の
あはれ見えける

荻の風露を拂ふ

をじか臥す萩さく野べの夕露をまばしもた
めぬ荻のうは風

陣の夕の荻の風

あたりまで哀あれとともいひがほに荻の音す
る秋のゆふかぜ

秋の歌よみける中に

吹わたる風も哀をひとしめていづくもすご
き秋のゆふぐれ
覺つかな秋いいかなる故のあれゞすゞろに
物の悲しかるらん
何事をいかに思ふとなけれどもたもとがわ
かぬ秋の夕ぐれ
何とおく物悲しくぞ見えわたる鳥羽田の面
のあきのゆふ暮

野の家の秋の夜

ねざめつゝ永き夜かなといはれ野に幾秋ま
でも我身へぬらむ

秋の歌に露をよむとて

大方の露はゝ何のあるならむたもとにおく
ゝ涙ありけり

山里に人々まかりて秋の歌よみけるに

山里の外面の岡のたかき木にそゞろがまし
き秋のせみかな

人々秋の秋十首よみけるに

玉にぬく露ゝこぼれて武藏野の草の葉むす
ぶあきのはつ風
穂に出てきのゝを薄まねく野にたはれてた
てる女郎花かな

花をこそ野べの物とゝ見に來つれ暮るれゞ
蟲の音をも聞きけり
萩の葉をふきすぎてゆく風の音に心みだる
〻秋のゆふぐれ
晴やらぬみ山の霧のたえ〴〵にほのかに鹿
の聲きこゆなり
かねてより梢の色を思ふかなしぐれはじむ
るみやまべの里
鹿の音を垣根よこめて聞くのみか月もすみ
けり秋の山ざと
庵にもる月の影こそさびしけれ山田の引板

の音ばかりして
わづかなる庭の小草のしら露をもとめてや
どる秋の夜の月
何とかく心をさへゝつくすらむ我なげきに
てくるゝ秋かな

月

秋の夜の空にいづてふ名のみして影ほのか
なる夕月夜かな
天の原月たけのぼる雲路をゞわけても風の
ふきはらはなむ
うれしとや待つ人ごとに思ふらむ山の端い

づる秋の夜の月

なか〳〵に心つくすもくるしきよ曇らぬい

りね秋の夜の月

いかばかり嬉しからまし秋の夜の月すむ空

に雲なかりせば

はりま潟なだのみ沖にこぎ出てあたり思は

ぬ月をおがめむ

月すみてなぎたる海のおもてかな雲の波さ

へ立もかゝらで

いさよはで出るゝ月の嬉しくて入る山の端

へつらき也けり

水の面にやどる月さへいりぬるゝ波の底に

も山やあるらむ

またはるゝ心やゆくと山の端にまばしな入

りそ秋の夜の月

明るまで宵より空に雲なくてまだこそかゝ

る月見ざりけれ

あさぢ原葉ずゑの露の玉ごとよひかりつら

ぬく秋の夜の月

秋の夜の月を雪かとおがむれば露もあられ

の心地こそすれ

閑に月をまつといふ事を

月ならでさしいるかげもなきまゝにくるゝ
嬉しき秋の山里

海辺月

清見潟月すむ夜半のうき雲ゝ不二の高嶺の
けぶりなりけり

池上月といふことを

みさびゐぬ池の面ての清けれゞ宿れる月も
めやすかりけり

同じ心を遍昭寺にて人々よみけるに

やどしもつ月の光のおほさはゝいかゝいつ
ともひろ澤の池

池にすむ月にかゝれる浮雲ゝはらひ殘せる
みさびなりけり

月池の氷に似たりといふことを

水なくてこほりぞ志たる勝間田の池あらた
むる秋の夜の月

名所の月といふことを

清見がた沖の岩こす志ら波にひかりをかは
す秋の夜のつき

なべてなき所の名をやをしむらむ明石ゝ分
て月のさやけさ

海辺明月

難波潟月のひかりに浦さえて波のおもてにこほりをぞしく

八〇

月前に遠く望むといふ事を

くまもなき月の光にさそはれていく雲井まで行く心ぞも

終夜月を見る

誰來ぬん月の光にさそはれてと思ふに夜半の明にけるかな

八月十五夜

山の端を出るよひより出るき哉こよひ出らする秋の夜の月

かぞへねどこよひの月のけしきよて秋の半をそらに知る哉

天の川名に流れたるかひありて今宵の月へことにすみけり

さやかなる影にて出るし秋の月十夜にあまれる五日也けり

うちつけに又來ん秋のこよひまで月故をしくなるいのち哉

秋へ唯こよひ一夜の名なりけりおなじ雲井に月へすめども

思ひせぬ十五のとしもある物を今宵の月の

八一

かゝらましかば

晴れる十五夜を

月見れば影なく雲につゝまれて今宵ならず
ば闇に見えまし

月の歌あまたよみけるに

いりぬとや東に人をしむらむみやこにい
づる山の端の月

待出てくまなきよひの月見ればくもぞ心よ
まづかゝりける

秋風や天つ雲井をはらふらむ更けゆくまゝ
に月のさやけき

いづくとて哀ならずいなけれどもあれたる
宿ぞ月ゝ寂しき

よもぎをけて荒たる宿の月見れば昔すみけ
む人ぞこひしき

身にしみて哀をらする風よりも月にぞ秋の
いろゝ見えける

虫の音もかれゆく野べの草の原に哀をそへ
てすめる月かげ

人も見ぬよしなき山の末までにすむらむ月
の影をこそ思へ

木の間もる有明の月をながむれば さびしさ

添ふる嶺の松風
いかにせん影をゞ袖にやどせども心のすめ
ゞ月のくもるを
悔しくも賤の伏屋とおとしめて月のもるを
も知らで過ぎける
あれわたる草の庵にもる月を袖にうつして
ながめつるかな
月を見て心うかれしいにしへの秋にも更に
めぐりあひぬる
何事もかはりのみゆく世の中におなじ影よ
てすめる月かな

よもすがら月こそ袖にやどりけれ昔の秋を
おもひいづれゞ
ながむれゞ外の影こそゆかしけれかはらじ
物を秋の夜の月
行方なく月に心のすみ〳〵て果いいかにか
ならむとすらむ
月影のかたぶく山をながめつゝをしむ志る
しやあり明の空
ながむるもまことしからぬ心地してよに餘
りたる月の影哉
行すゑの月をゞ志らず過ぎ來つる秋まだか

ゝる影ゝなかりき

まことゝも誰か思はんひとり見て後に今宵の月をかたらバ

月のため世と思ふがかひなきにおばし曇りて夜をおらせよ

あまの原朝日山より出れバや月のひかりのひるにまがへる

有明の月の頃にしありぬれバ秋ゝよるなきこゝちこそすれ

中々にとき〳〵雲のかゝるこそ月をもてなす限ありけれ

雲晴るゝあらしのおとゝ松にあれや月も緑のいろにはえつゝ

さだめなく鳥やあくらむ秋の夜ゝ月の光をおもひまがへて

誰もみなことわりとこそ定むらめ世をあら、そふ秋の夜の月

影さえてまことに月のあかき夜ゝ心も空にうかびてぞすむ

くまもなき月の面てに飛ぶ雁のかげを雲かと思ひけるかな

ながむれバいなや心の苦しきにいたくなす

みそ秋の夜の月

雲も見ゆ風もふくれゞあらくなるのどかな

りつる月の光を

もろともに影をならぶる人もあれや月のも

りくる笹の庵りに

なか〳〵に曇ると見えて晴るゝ夜の月の光

へ添ふ心地する

うき雲の月の面てにかゝれどもはやく過る

へうれしかりけり

過やらで月近くゆく浮雲のたゞよふ見れゞ

わびしかりけり

厭へどもさすがに雲の打ちりて月のあたり

を離れざりけり

雲はらふ嵐に月のみがかれてひかりえてす

む秋のそらかな

くまもなき月の光をながむれゞまづをばす

ての山ぞ戀しき

月さゆるあかしの瀬戸に風ふけゞ氷のうへ

よたゝむ去ら浪

天の原おゝじ岩戸をいづれども光ことゝゝる

あきの夜のつき

かぎりなく名殘をしきゝ秋の夜の月にとも

なふ明ぼのゝ空

九月十三夜

こよひへと所えがほにすむ月の光もてなす
菊のまら露

雲きえし秋の半のそらよりも月へこよひぞ
名におへりける

後九月つきなもてあそぶといふことを

月見れば秋くはゝれる年へまたわかぬ心も
そふにぞ有ける

月滝を照すといふことを

雲消ゆる那智の高嶺よ月たけてひかりをぬ

ける滝のまら糸

久しく月を待つといふ事を

出ながら雲にかくるゝ月影をかさねて待つ
やふたむらの山

雲間に月を待つといふ事を

秋の月いさよふ山の端のみかへ雲の絶間も
またれやへせぬ

月前薄

をしむ夜の月にならひて有明のいらぬをま
ねく花すゝき哉

花すゝき月の光にまがはましふかきますほ

の色にそめずゞ

月前萩

月すむと萩うゑざらむ宿ならゞ哀すくなき
秋にやあらまし

月照野花といふ事を

月なくゞ暮るれゞ宿へ歸らまし野べにゝ花
のさかりおりとも

月前野花

花の色をかげに移せゞ秋の夜の月ぞ野守の
かゞみなりける

月前草花

月の色を花にかさねて女郎花うはものゝまた
に露をかけたる
よひのまの露にゝをれて女郎花有明の月の
かげにたはるゝ

月前女郎花

庭さゆる月なりけりゝ女郎花霜にあひぬる
花と見たれゞ

月前虫

月のすむあさ茅にすだく蟲つゆのおくにや
あきを知るらむ
露ながらこぼさて折らむ月かげに小萩がえ

だのまつ蟲の聲

深夜聞蛩

我世とや更け行く月を思ふらむ聲もやすめぬきり〳〵すかな

田家月

夕露の玉ぢく小田のいなむしろかへす穂ずゑに月ぞ宿れる

月前鹿

たぐひなき心地こそすれ秋の夜の月すむ嶺のさを鹿の聲

月前紅葉

木の間もる有明の月のさやけきに紅葉をそへて眺めつる哉

賜月をへだつといふ事を

立田山月すむ嶺のかひぞなきふもとに霧の晴れぬかぎりは

月前に古へを懐ふ

古(いにしへ)を何につけてか思ひいでん月さへかはる世ならましかば

月よせて思を述べけるよ

世の中のうきをも知らですむ月の影へ我身の心地こそそれ

よの中ハ曇り果ぬる月なれやさりともと見し影も待たれず

いとふ世も月をむ秋に成ぬれバながらへず

バと思ふなる哉

さらぬだにうかれて物を思ふ身の心をさそふあきの夜の月

捨ていにし憂世に月のすまであれなさらバ心のとまらざらまし

あながちに山にのみすむ心かなたれかハ月のいるを惜まぬ

春日に登りたりけるに常よりも月明く哀なりけれ

バ

ふりさけし人の心ぞ忘られけるこよひ三笠の山をながめて

月寺のほとりにあきらかなり

壺と見る月にあくるを忘らましや時つく鐘の音なかりせバ

人々住吉にまゐりて月を翫びけるに

かたそぎの行合ぬ間よりもる月やさえて御袖の霜におくらむ

波にやどる月を汀よゆりよせて鏡にかくるすみよしのきし

旅まかりけるにとまりて

あかずのみ都にて見し影よりも旅こそ月ハあはれなりけれ

見しまゝに姿もかげもかはらねバ月ぞ都のかたみなりける

旅宿の月をおもふといふ事を

月は猶夜ゝ〳〵ごとにやどるべしわがむさぼく草の菴りも

月前に友に逢ふといふことを

うれしきハ君にあふべき契ありて月に心のさそはれにけむ

心ざすことありて安藝の一宮へ詣てけるよ高富の浦と申す所に風に吹きとめられて程經けり遂ふきたる庵より月のもるを見て

波の音を心にかけてあかすかなとまもる月のかげを友にて

詣てつきて月いとあかくて哀に覺えけれバよみける

もろともに旅なる空に月もいでてすめバや影の哀なるらむ

旅宿の月といへる心をよめる

あはれ去る人みたらバと思ふ哉旅寐のとこ

にやどる月かげ
月やどるおなじうきねの波にしも袖ぬぼる
べき契ありけり
都にて月をあはれと思ひしゝ數よりほかの
すさびおりけり

船中初雁

沖かけて八重の汐路をゆく舟ゝほのかにぞ
きくはつ雁の聲

朝に初雁をきく

横雲の風にわかるゝまのゝめに山飛びこゆ
るはつかりの聲

夜に入て雁を聞く

鳥羽にかく玉づさの心地してかりなきわた
るゆふやみの空

雁の聲遠近

白雲をつばさにかけてゆく雁のかど田の面
の友ぢたふなり

霧中雁

玉章のつゞきゝ見えて雁がねの聲こそ霧に
けたれざりけれ

霧上雁

空色のこなたをうらに立つ霧のおもてに雁

のかくる玉づさ

霧

鵜なく折にしなれぬきりこめてあはれさび
しき深草のさと

霧行客をへだつ

名殘おほみむつごとつきて歸りゆく人をぬ
霧も立隔てけり

山家霧

たちこむる霧のまたにもうづもれて心はれ
せぬみ山べの里
よをこめて竹の編戸に立つ霧の晴れぬやが

てや明けむとすらむ

鹿

まだり咲く萩の古枝に風かけてすがひ〳〵
にを鹿おくなり
萩がえの露ためず吹くあきかぜにを鹿なく
ゐり宮城野の原
夜もすがら妻こひかねてなく鹿の涙や野べ
の露となるらむ
さらぬだに秋ゐ物のみ悲しきを涙もよほす
さをまかのこゑ
山おろしに鹿のねたぐふ夕暮を物悲しとゐ

いふにやあらむ
おかもわぶ空の氣色もおぐるめり悲しかれ
ともなれる秋哉
何となくそまゝほしくぞ思ほゆる鹿の音た
えぬ秋の山ざと

小倉の蹴にをみ侍りけるに鹿の鳴きけるを聞て

を鹿なく小ぐらの山のすそ近みたゞひとり
をむわが心かな

曉の鹿

夜をのこすねざめに聞くぞ哀なる夢野の鹿
もかくや鳴きけむ

夕ぐれに鹿をきく

おの原やさりにまがひてなく鹿のこゑかす
かなる秋の夕暮

幽居に鹿をきく

とおりねぬはたの假屋に明す夜ゝおか哀お
る物にぞ有ける

田庵の鹿

小山田の庵近く鳴くおかの音におどろかさ
れて驚かすかな

人を尋れて小野にまかりけるに鹿のなきけれバ

鹿の音をきくにつけてもすむ人の心知らる

小野の山ざと

獨聞搭衣

獨寐の夜寒にかるるにかさねばや誰がためにうつ衣かるらむ

隔里搭衣

さ夜衣いづこの里にうつならん遠くきこゆるつちの音かな

年頃申されたる人の伏見に住むと聞きて尋ねまかりたりけるに庭の道も見えず荒げりて虫なきけれ

〃

わけて入る袖に哀をかけよとてつゆけき庭に虫さへぞなく

虫の歌よみ侍りけるに

夕されや玉うごくつゆのこざゝふにこゑまづならを蛬かな

秋風にほずゑ波よる苅かやの下葉にむしのこゑみだるなり

蛬なくなる野べのよそなるをおもはぬ袖につゆぞこぼるゝ

秋風のふけゆく野べの虫の音のはしたなきまぞぬるゝ袖かな

虫の音をよそに思ひてあかさねゞ袂も露わ

野邊にかはらじ

野邊になく虫もや物いへ悲しきと答へましか

ばとひて聞まし

秋の夜に聲もをしまずなく虫をつゆまどろ

まず聞あかす哉

あきの夜を獨や鳴てあかさましともあふ虫

の聲なかりせば

秋の野の尾花が袖にまねかせていかなる人

をまつ虫のこゑ

よもすがら秋に虫の音をかけてはらひわづ

らふ袖のしら露

獨寐のねざめのとこのさむしろに涙もよほ

すきりぐす哉

蛩夜さむになるを告げがほにまくらのもと

に來ついなく也

虫の音をよわりゆくかときくからに心に秋

の日數をぞふる

秋ふかみ弱るい虫の聲のみかきく我とても

たのみやいある

虫のねにさのみぬるべき秋かいあやしや心

ものおもふらし

ものおもふねざめとぶらふ蛩人よりもけに

つゆけかるらむ

閑聞虫

ひとり寐の友にいなられて蛩なく音をきけば
ものおもひそふ

故郷虫

草ふかみ分入てとふ人もあれやふりゆく宿
のすゞ虫のこゑ

雨中虫

かべに生ふる小草にわぶる蛩ぞなぐるゝには
の露いとふらし

田家に虫なきく

小萩さく山田のくろの虫の音にいほもる人
や袖ぬらすらむ

夕べの道の虫といふ事を

うち具する人なき道の夕されゞ聲たておく
るくつわ虫かな

田家秋夕

ながむれゞ袖にも露ぞこぼれける外面の小
田の秋の夕ぐれ

ふきすぐる風さへことに身にぞ沁む山田の
いほの秋の夕暮

京極太政大臣中納言と申しける折柳をおびたゞし

き程にまたてゝ鳥羽院にまゐらせ給ひたりける鳥羽の南殿の東面のつぼに所なきほどに植させ給ひけり公重少將人々すゝめて菊もてなさせけるにくはゝるべきよしありければ

君が住む宿のつぼにゝ菊ぞかざる仙の宮といふべかるらむ

菊

いく秋に我あひぬらむ長月のこゝぬかにつむ八重菊のはゝ

秋ふかみならぶ花なき菊ゝれゝ所を霜のおけとこそおもへ

月前菊

ませなくゝ何をゝるしに思はまし月もまがよふゝら菊の花

秋物へまかりける道にて

心なき身にもあはれゝゝられけり鴫たつ澤の秋のゆふぐれ

嵯峨に住みける頃隣の坊に申すべき事ありてまかりけるに道もなく荻の葉りければ

立よりて隣とふべき垣にそひてひまゝくはへる八重葎かゝ

題ゝらず

いつよりか紅葉の色にそむべきと時雨に曇る空にとはゞや

紅葉未遍といふことを

いとか山時雨に色をそめさせてかつ〳〵織れる錦なりけり

山家紅葉

そめてけり紅葉の色のくれなゐをあぐると見えしみ山べの里

秋の末に松虫のなくを聞て

さらぬだに聲よわりにし松虫の秋の末にいきゝもわかれず

限あれゞ枯れゆく野べにいかゞせん蟲の音のこせ秋の山里

寂蓮高野に詣てて深き山の紅葉といふ事をよみける

さま〳〵に錦ありけるみ山かな花見し嶺をあぐれそめつゝ

紅葉色深しといふ事を

限あれゞいかゞ色も勝るべきをあかずあぐるゝ小倉山哉

もみぢ葉のちらで時雨の日數へゞいかばかりなる色かあらまし

霧中紅葉

錦はる秋のこずゑを見せぬかなへだつる霧の宿をつくりて

賤しかりける家に蔦の紅葉面白かりけるを見て

思はずよよしある賤がすみか哉蔦の紅葉をのきに這はせて

寄紅葉戀

我涙ちぐれの雨よたぐへばや紅葉のいろのそでにまがへる

東へまかりけるに志のぶの奥に侍りける杜の紅葉

ときはなる松のみどりも神さびて紅葉ぞ秋いあけの玉がき

草花野路落葉

紅葉ちる野はらをわけて行く人い花ならぬまで錦きるべし

秋の末に法輪にこもりてよめる

大井川ゐせぎによどむ水の色に秋ふかくゐる程ぞ知らるゝ

小倉山ふもとに秋のいろゝあれや梢のにしき風にたゝれて

わが物と秋の梢をおもふかなをぐらのさと

に家居せしより
山ざとゝ秋の末にぞおもひ知る悲しかりけ
りこがらしの風
落果る秋のかたみにぞばし見ん紅葉ちらす
あこがらしの風
秋くるゝ月なみわかぬ山賤のこゝろうらや
むけふの夕ぐれ

秋夜秋を惜む

をしめども鐘の音さへかはる哉霜にや露の
むすびかふらむ

冬

長樂寺にて夜紅葉を思ふといふ事を人々よみける

夜もすがらをしげなく吹く嵐哉わざと時雨
のそむる紅葉を
神無月木の葉のおつるたびごとに心うかる
しみ山べのさと

題志らず

ねざめする人の心をわびしめて志ぐるゝ音
ゝ悲しかりけり

十月はじめつかた山里にまかりたりけるに蛩の聲のわづかにきこえけれバよみける

霜うづむ草が下のきり〳〵すあるかあきかに聲きこゆなり

山家落葉

道もなし宿ゝ木の葉にうづもれぬまだきせさする冬籠かな

木の葉ちれバ月に心ぞあくがるゝみ山がくれにすまんと思ふよ

曉落葉

時雨かとねざめの床に聞ゆるゝ嵐にたへぬ木の葉なりけり

水上落葉

立田姫そめしこずゑのちるをりゝくれなゐ、あらふ山川の水

落葉

嵐はく庭の落葉のをしき哉まことのちりになりぬと思へバ

月前落葉

山おろしの月に木の葉を吹かけて光にまがふ影を見るかな

瀧上落葉

木枯に峰の紅葉やたぐふらむ村濃に見ゆる
瀧のまらいと

一二二

山家時雨

宿かこふはゝその柴の色をさへまたひてそ
むる初時雨かな

閑中時雨といふ事を

おのづから音する人もおかりけり山廻りず
る時雨ならでゝ

時雨の歌よみけるに

東屋のあまりにもふる時雨かなたれかゝまち
ちん神無月とゝ

落葉網代にとゞまる

紅葉よる網代の布の色そめてひをくるゝと
ゝ見ゆる也けり

山家枯草といふ事を発雅僧都の坊にて人々よみけ
るに

かきこめしそそ野の薄霜枯てさびしさまさ
るまばの庭かな

野のわたりの枯たる草といふ事を双林寺にてよみ
けるに

さま〳〵に花さきたりと見し野べの同じ色
にも霜枯にけり

一二三

枯野の草をよめる

わけかねし袖に露をゞとめ置て霜にくちぬる眞野の萩原

霜うつく枯野の草ゝさびしきにいづくゝ人の心とむらむ

霜がれてもろくくだくる萩の葉をあらく吹なる風の音かな

冬の歌よみけるに

難波江のいり江の芦に霜さえてうら風さむき朝ぼらけかな

玉かけし花のかつらもおとろへて霜をいたゞく女郎花かな

山櫻初雪ふれゞさきにけりよし野ゝさとにふゆごもれども

さびしさにたへたる人の又もあれな庵りならべん冬の山里

水邊寒草

霜にあひて色あらたむる芦のほの寂しく見ゆる難波江の浦

山里の冬といふ事を人々よみけるに

玉まきし垣ねのまくず霜がれてさびしく見ゆる冬の山ざと

寒夜旅宿

旅寢する草のまくらに霜さえてありあけの
月の影ぞ待るゝ

山家冬月

冬がれのすさましげなる山ざとに月のすむ
こそ哀なりけれ

月出る峯の木の葉も散はてゝふもとの里ゝ
うれしかるらむ

月枯たる草を照す

花におく露に宿りし影よりもかれ野の月ゝ
あはれなりけり

こほりおく沼の芦原風さえて月もひかりぞ
さびしかりける

閑なる夜の冬の月

霜さゆる庭の木の葉をふみ分て月ゝ見るや
と訪ふ人もがな

庭上冬月といふ事を

さゆと見えて冬ふかくなる月かげゝ水なき
庭に氷をぞおく

鷹狩

あはせたる木ゐのはし鷹をきといし犬かひ
人の聲おきる也

雪中鹿狩

かきくらす雪にきゝすゝ見えねども羽音に
鈴をたぐへてぞやる
降雪に鳥立も見えずうづもれてとりどころ
なき御狩野の原

夜初雪

月いづる軒にもあらぬ山の端のあらむも志
るし夜半の白雪

庭雪似月

木の間もる月の影とも見ゆる哉はだらにふ
れる庭の志ら雪

雪の朝靈山と申す所にて眺望を人々よみけるよ

たけのぼる朝日のかげのさすまゝに都の雪
ゝきえみ消ずみ

枯野に雪の降たるを

かれはつる萱がうは薬にふる雪ゝ更に尾花
の心地こそすれ

雪の歌よみけるに

あらち山さかしく下る谷もなくかじきの道
をつくる志ら雪
たゆみつゝそりのはや緒もつけなくよ積り
にけりな越の白雪

雪道を埋む

ふる雪にあをりし柴もうづもれて思はぬ山に冬ごもりせる

秋の頃高野へまゐるべきよし頼めてまゐらざりける人のもとへ雪ふりて後申しつかはしける

雪ふかくうづみてけりあ君來やと紅葉の錦きさしやま路を

雪朝待人といふ事を

我宿に庭より外の道もがなとひ來む人のあとつけて見ん

雪に港うづもれてせんかたなく面白かりけり今も

來たらばとよみけんことを思ひ出て見けるほどに鹿の分てとほりけるを見て

人來ばと思ひて雪を見る程にあか跡つくることもありけり

雪朝會友といふ事を

跡とむる駒の行へいさもあらばあれ嬉しく君にゆきも逢ぬる

雪埋竹といふことを

雪うづむ園の呉竹をれふしてねぐらもとむるむらすゞめ哉

賀茂の臨時の祭かへり立の御神楽土御門内裏にて

侍りけるに竹のつぼに雪のふりたりけるを見て

うらがへす小忌の衣と見ゆる哉竹のうら葉にふれるまら雪

社頭雪

玉がきゝあけもみどりも埋もれて雪おもしろき松の尾の山

雪の歌どもよみけるに

何となくくるゝ雪のおとまでも山べゝ雪ぞあはれなりける

雪ふれば野路も山路もうづもれて遠近まら ぬ旅のそらかな

あをね山苔のむしろの上にして雪ゝまとねの心地こそすれ

うの花のこゝちこそすれ山里の垣ねの柴をうづむまらゆき

折ならぬめぐりの垣のうの花をうれしく雪のさかせつる哉

問へな君夕ぐれになる庭の雪をあとなきよりゝ哀おらまし

船中霰

迫門渡るたなおし小舟心せよあられ亂るゝまきよこぎる

深山霰

仙人のまきのかり屋の下ぶしよ音する物ゝあられなりけり

櫻の木に霰のたばしるを見て

たゞゝおちて枝を傳へる霰かゝつぼめる花のちる心地して

月前炭竈といへる事を

限あらん雲こそあらめ炭がまのけぶりに月のすゝけぬる哉

千鳥

淡路がた磯わの千鳥こゑあげし迫門の汐風さえまさる夜ゝ

淡路がた迫門の汐干の夕暮に須磨よりかよふ千鳥おくなり

さゆれども心やすくぞきゝあかす川瀬の千鳥友具してけり

霜さえて汀ふけゆくら風を思ひ知りげになくちどりかな

やせ渡るみなとの風に月ふけて汐干るかたに千鳥なくなり

題しらず

千どりなく繪島の浦にそむ月を波にうつし

て見るこよひ哉

氷留山水

岩間せく木の葉わけこし山水をつゆもらさぬい氷なりけり

池上水

水上に水や氷をむすぼらむ繰るとも見えぬたきの志らいと

氷筏をとづといふ事を

氷わる筏のさをのたゆけれゞもちやこさましほつの山ごえ

冬の歌十首よみけるに

花もかれ紅葉も散ぬ山里ハさびしさをまたとふ人もがな

ひとりすむかた山蔭の友なれやあらしにはるゝ冬の夜の月

津の國の芦の丸屋の寂しさハ冬こそわきてとふべかりけれ

さゆる夜いよその空にぞをしもなく氷りにけりな昆陽の池水

よもすがら嵐の山にかぜさえて大井の川にこほりをぞ志く

さえわたるうら風いかに寒からむ千鳥むれ

ねるゆふ崎の浦

山里ハまぐれし頃のさびしきよあられの音

ハ漸まさりけり

風さえてよすれゞやがて氷りつゝかへる波

なき志賀の唐崎

吉野山ふもとにふらぬ雪なれゞ花かと見て

や尋ね入らまし

宿ごとにさびしからじとはげむべし煙こめ

たる小野の山里

題しらず

山櫻おもひよそへてながむれゞ木ごとの花

ハ雪まさりけり

仁和寺の御室にて山家閑居見雪といふ事をよませ給ひけるに

ふりつもる雪を友にて春までハ日をおくる

べきみ山べの里

山里に冬深しといふ事を

とふ人も初雪をてそわけこしか道とぢてけ

りみやまべの里

山居雪といふ事を

年の内ハとふ人さらにあらじかし雪も山路

も深きすみかを

世を遁れて鞍馬の奥に侍りけるにかけひの氷りて水までこざりけるに春になる迄ハかく侍るなりと申しけるを聞てよめる

わりなしやこぼるる筧の水ゆゑに思ひすてゝし春のまたるゝ

陸奥國にて年の暮によめる

常よりも心ぼそくぞおもほゆるたびのそらにて年の暮ぬる

山家歳暮

新らしき柴のあみ戸をたちかへて年のあくるを待わたる哉

東山にて人々年の暮に思を述べけるに

年くれしその營(いとなみ)い忘られてあらぬさまなるいそぎをぞする

年の暮にあがたより都なる人のもとへ申し遣しける

おしなべて同じ月日の過ゆけばみやこもかくや年ゝ暮ぬる

山里に家ゐをせずば見ましやゝくれなゐ深き秋のこずゑを

歳暮に人のもとへ遣はしける

おのづからいはぬを慕ふ人やあると休らふ

程に年の暮ぬる

常ふき事をよせて

いつか我むかしの人といはるべきかさなる
年を送り迎へて

戀

名を聞て尋ぬる戀

あはざらん事をぞおもらずはゝき木の伏屋と
聞て尋ね行く哉

自門歸戀

たて初てかへる心いにしき木の千束まつべ
き心地こそすれ

涙顯戀

おぼつかないかにと人の呉織(くれはとり)あやむるまて
にぬるゝ袖かな

中々にゆめにうれしきあふ事いうつゝに物
を思ふなりけり
あふことを夢なりけりと思ひわく心の今朝
い恨めしきかな
あふと見ることを限の夢路にてさむる別の
なからましかば
夢とのみ思ひあさるゝ現こそあひ見る事の
かひなかりけれ

後朝

今朝よりぞ人の心いつらからて明はなれゆ
く空をうらむる
逢ふ事をあのばざりせば道芝の露よりさき
におきて來ましや

後朝郭公

さらぬだに歸りやられぬ志のゝめにそへて
かたらふ郭公哉

後朝花橘

重ねてからまほしきうつり香を花橘に
今朝たぐへつる

後朝霧

やすらはん大方の夜い明ぬとも闇とかてへ

る霧にこもりて

歸るあしたの時雨

ことづけて今朝の別いやすらはむ時雨をさへや袖にかくべき

逢ひてあはぬ戀

つらくともあはずべ何の習ひにか身の程知らず人を恨みむ

さらべ唯さらでぞ人のやみなましさて後も又さもやあらじと

恨

もらさじと袖よあまるをつゝましし情をも

のぶ涙なりせべ

ふたゝび絶ゆる戀

唐衣たちはあれにしまゝならべかさねて物思はざらまし

寄絲戀

賤の女がすゝくる絲にゆづりおきて思ふに違ふ戀もする哉

寄梅戀

折らべやと何思はまし梅の花めづらしからぬ匂ひなりせべ

ゆきすりに一枝をりし梅が香の深くも袖に

ちみにけるかな

寄花戀

つれもなき人に見せばや櫻花風にちたがふ
こゝろよわさを

花を見る心ゝよそにへだたりて身につきた
るゝ君がおも影

寄殘花戀

葉がくれよ散どゞまれる花のみぞ忍びし人
に逢ふ心地をる

寄歸雁戀

つれもなく絶にし人を雁がねのかへる心と

おもはましかば

寄草花戀

くちてたゞちをれば よしや我袖も萩の下枝
の露によそへて

寄鹿戀

妻戀ひて人目つゝまぬ鹿の音を淡む袖のみ
さをなるかな

寄刈草戀

一方にみだるともあきわがこひや風さだま
らぬ野べの刈萱

寄霧戀

夕霧のへだてなくこそ思ひつれ隠れて君が
あはぬなりけり

寄紅葉戀

わが涙時雨の雨にたぐへばやもみぢのいろ
の袖にまがへる

寄落葉戀

朝ごとに聲ををさむる風の音ゝよをへてか
るゝひとの心か

寄氷戀

春をまつ諏訪のわたりもある物をいつを限
にすべきつらゝぞ

寄水鳥戀

我袖の涙かゝるとぬれてあれなうらやまし
きゝ池のをし鳥

賀茂の方にさいきと申す里に冬深く侍りけるに人
々まうて來て山里の戀といふことを

篤にも君がつらしやむすぶらむ心ぼそくも
絶えぬあるかな

商人に文をつくる戀といふ事を

思ひかね市の中にゝ人おほみゆかりたづね
てつくる玉づさ

海路戀

波のきくことをも何か煩はん君があふべき
みちとおもはば

松風増戀

いはきろの松風きけばものおもふ人も心そ
むすぼゝれける

九月ふたつありける年閏月を忌む戀といふことを
人々よみけるに

長月のあまりにつらき心にて忌むとい人の
いふにやあるらむ

御あれの頃賀茂にまゐりたりけるよさうじにはじ
かる戀といふ事を人々よみけるに

ことつくるみあれの程をすぐしても猶やう
月の心なるべき

同社にて神に祈る戀といふことを神主どもよみけ
るに

天くだる神の験のありなしをつれなき人の
ゆくへにて見ん

月

月待つといひおされつるよいの間の心の色
の袖に見えぬる
知らさりき雲井のよそに見し月の影を袂に
やどすべしとい

あはれとも見る人あらば思はむ月のおも
てにやどす心を
月見ればいでやとよのみ思ほえてもたりに
くゝもなる心哉
弓張の月よはづれて見し影のやさしかりし
ゝいつか忘れむ
おも影の忘らるまじき別かなあごりを人の
月にとゞめて
あきの夜の月や涙をかこつらむ雲なき影を
もてやつすとて
天の原さゆるみそらゝ晴れながらなみだぞ

月の隈になるらむ
物思ふ心のたけぞ知られぬるよな〳〵月を
あがめあかして
月を見る心のふしをとがよして便えがほに
ぬるゝそでかな
おもひ出る事ゝいつもといひながら月にゝ
たへぬ心也けり
足曳の山のあなたに君すまばいるとも月を
惜しまざらまし
なげけとて月やゝ物を思はするかこち顔な
る我なみだかな

君にいかで月に爭ふほどばかりめぐりあひつゝ影を並べん

白妙の衣かさぬる月かげのさゆる眞そてにかゝるおらつゆ

忍び寐の涙たゝふる袖のうらになづまずやどる秋の夜の月

物おもふ袖にも月のやどりけり濁らてすめる水ならねども

戀しさをもよほす月の影なれゞこぼれかゝりてかこつ涙か

よしさらゞ涙の池に身をなして心のまゝに

つきをやどさむ

うちたえてなげく涙に我袖のくちおゞなどか月をやどさむ

よゝふとも忘れがたみのおもひ出の袂に月の宿るばかりぞ

涙ゆゑ隈なき月ぞ曇りぬるあめのはら〳〵ねのみおかれて

あやにくにおるくも月の宿るかな夜にまぎれてと思ふ袂に

おもかげに君が姿を見つるよりよはかに月の曇りぬるかな

よもすがら月を見顔よもてなして心の闇よ
まよふころかな

秋の月物おもふ人のためとてや影よあはれ
をそへて出らむ

へだてたる人の心のくまにより月をさやか
に見ぬが悲しさ

涙ゆゑつねゝ曇れる月なれゞなかれぬをり
ぞ晴間なりける

くまもなき折しも人を思ひいでて心と月を
やつしつるかな

物おもふ心の隈をのごひをてゝ曇らぬ月を

見るよしもがな

こひしさや思ひよわるとながむれゞいとゞ
心をくだく月哉

ともすれゞ月すむ空にあくがるゝ心の果を
ぢるよしもがな

おがむるに慰むことゝなけれども月を友に
てあかすころ哉

物思ひておがむる頃の月の色にいかばかり
なる哀そふらむ

天雲のわりなきひまをもる月のかげばかり
だにあひ見てしがな

秋の月ゐのだの杜の千枝よりもゐげき歎き
や限になるらむ
思ひ知る人あり明のよゐりせゞつきせず身
をゝ恨みざらまし

戀

數ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこ
そゝ身をも恨みめ
打向ふ其あらましの面影をまことにゐして
見るよしもがな
山賤のあら野を志めて住そむるかたゞより
ゐる戀もする哉

常磐山椎の下柴かりすてむ隱れておもふか
ひのゐきかと
歎くとも知らゞゝや人のゐのづから哀とおも
ふ事もあるべき
何とゐくさをがに惜き命かなありへゞ人や
おもひ知るとて
なに故か今日まで物を思はまし命にかへて
あふせなりせゞ
あやめつゝ人知るとてもいかゞせん忍び果
べき袂ならねゞ
なみだ川深く流るゝ水脉ならゞ淺き人めに

つゝまざらまし
ゐばしこそ人目づつみよせかれけれはてゝ
泪やなるたきの川
物思へゞ袖に流るゝ泪川いかゐるみをにあ
ふせありなむ
うきたびになど〳〵人を思へどもかなはで
年の積りぬる哉
中々になれぬ思ひのまゝならゞ恨ばかりや
身につもらまし
何せんよつれなかりしを恨みけむ逢ずゞか
ゝる思せましや

むかはゝ（モトノマヽ）我がなげきのむくいにて誰ゆゑ
君が物を思はん
身のうさの思ひゐらるゝことわりに抑へら
れぬゝ涙也けり
日をふれゞ袂の雨のあしそひてはるべくも
なき我こゝろ哉
かきくらす涙の雨の足ゐげみさかりに物の
なげかしきかな
物思へどかゝらぬ人もある物をあはれあり
ける身の契かな
岩代の松風きけゞ物をおもふ人もこゝろ

むすぼほれける

なほざりの情ゝ人のある物をたゆるゝ常の

ならひあれども

何とゝかずまへられぬ身の程に人をうら

むる心ありけむ

うきふしをまづ思ひまる涙かなさのみこそ

ゝと慰むれども

さま〳〵に思ひ亂るゝ心をゞ君がもとにぞ

つがねあつむる

もの思へゞちゝに心ぞくだけぬる信太の森

の枝ならねども

かゝる身におほし立けむ乳根の親さへつ

らき戀もする哉

おぼつかな何の報のかへり來て心せだむる

あたとなるらむ

かきみだる心やすめの言草ゝあはれ〳〵と

なげくばかりぞ

身を知れゞ人の咎とゝ思はぬにうらみがほ

にもぬるゝ袖哉

中々になるゝつらさにくらぶれゞうとき恨

ゝみさを也けり

人ゝうし歎きゝ露もなぐさまずこゝさゝい

かにすべき心ぞ
日にそへて恨みいとゞおほ海のゆたかな
りける我涙かな
さる事のあるおりけりと思ひ出ておのぶ心
をおのべとぞ思ふ
今ぞおるおもひ出よと契りしゝもすれんと
ての情なりけり
難波潟なみのみいとゞ數そひて恨みのひま
や袖のかわかむ
心ざしのありてのみやゝ人をとふ情ゝなし
と思ふばかりぞ

なか〳〵に思ひ知るてふ言の葉ゝとはぬに
過て恨めしきかな
などか我事の外なる歎きせてみさをなる身
に生れざりけむ
汲ておる人もありけむおのづからほりかね
の井の底の心を
煙立つ富士の思ひのあらそひてよだけき戀
をするがへぞゆく
涙川さかまくみをのそこふかみみおぎりあ
へぬわが心かな
迫門口に立るうしほのおほよどみよどむと

ゝひもなき涙哉

いそのまよ波あらけなる折々いうらみをかづく里のあま人

東路やあひの中山ほどせばみ心のおくの見えがてそあらめ

いつとなく思ひにもゆる我身かな淺間の煙おめる世もなく

播磨路や心のすまに關すゑていかでわが身の戀をとゞめむ

哀てふなさけに戀のおぐさまゞとふ言の葉や嬉しかちまし

物思ひゝまだ夕ぐれのまゝなるに明ぬとつぐるあば鳥の聲

夢をあど夜ごろ頼まで過ぎきけむさらて逢べき君ならなくに

さゝといひて衣返して打ふせど目の合ゞやゝ夢も見るべき

戀らるゝうき名を人に立じとてあのぶわりなきわが袂かな

夏草のあげりのみゆく思ひかな待るゝ秋のあはれ知られて

紅のいろにたもとのあぐれつゝ袖に秋ある

こいちこそすれ
哀とてあどとふ人のなかるらんものおもふ
やどの荻の上風
わりなしやさこそ物思ふ袖ならめ秋にあひ
でもおける露哉
いかにせん來ん世の蜑とかる程よみるめ難
くて過るうらみを
秋深き野べの草葉にくらべばやものおもふ
ころの袖の白露
もの思ふ涙ややがてみつせ川人をまづむる
ふちとなるらむ

あはれ〳〵此世のよしやさもあらばあれ來
ん世もかくや苦しかるべき
たのもしなよひ曉の鐘のおとに物思ふ罪も
つきざらめやの

山家集上終

山家集下

雜

題しらず

つくづくと物を思ふにうちそへてをり哀なる鐘のおとかな

あさけありし昔のみ猶忍ばれてあがらへまうき世にもある哉

軒ちかき花たちばなに袖しめて昔を志のぶなみだつゝまん

何ごとも昔をきくゝなさけ有てゆゑあるさ

まに忍ばるゝ哉

わがやどゝ山のあなたにある物を何とうき世をさらぬ心ぞ

くもりなき鏡の上にゐる塵をめにたてゝ見る世と思はゞや

ながらへんと思ふ心ぞ露もなき脈ふにだにもたらぬ憂身ゝ

思ひ出る過にし方をはづかしみあるに物うき此世なりけり

世につかふべかりける人のこもりゐたりけるもとへ遣はしける

世の中にすまぬもよしや秋の月にごれる水の湛ふさかりに

五月しやうぶを人のつかはしたりける返事に

世のうきにひかるゝ人ゝ菖蒲草心のねなきこゝちこそすれ

花橘によせて思を述べけるに

世のうきを昔がたりになしはてゝ花たちばゐに思ひ出ゞや

世にあらじと思ひける頃東山よりて人々霞によせて思をのべけるに

そらになる心ゝ春の霞にてよにあらじとも

おもひたつかあ

おなじ心を

世を厭ふ名をだにもさい留め置て數ならぬ身の思出にせむ

いにしへごろ東山にあみだ房と申しける上人の菴室にまかりて見けるに何となく哀ふかおぼえてよめる

柴の庵ときくい賤しき名なれどもよに頼もしき住居也けり

世を遁れける折ゆかりなりける人の許へいひ贈りける

世の中を背き果ぬといひおかむ思ひ出るべき人いなくとも

はるかなる所にこもりて都なりける人のもとへ月の頃つかはしける

月のみやうはの空なるかたみよて思ひもいでゝ心かよはむ

世をのがれて伊勢の方へまかりけるに鈴鹿山にて

鈴鹿山うき世をよそにふりすてゝいかになり行く我身なるらむ

述懐

何ごとゝとまる心のありけれゝさらゝしも

又世の厭はしき

侍從大納言成道のもとへ後の世の事おどろかし申
したりける返事に

慈かを君によりてぞながき夜の久しき夢ゝ
さむべかりける

かへし

おどろかぬ心なりせゞ世の中を夢ぞと語る
かひなからまし

中院右大臣出家思ひ立つよし語り給ひけるに月の
いとあかくよもすがら哀にて明けにけれゞ歸りけ
り其後其夜の名殘おぼかりしよしいひ送り給ふと

て

夜もすがら月をながめて契り置きし其むつ
ごとに闇ゝ晴にし

かへし

すむと見し心の月しあらはれゞこの世も闇
ゝ晴さらめやゝ

爲業ときはに堂供養しけるに世をのがれて山寺に
住み侍りけるに志たしき人々まうて來たりと聞て
いひ遣はしける

いにしへにかはらぬ君が姿てそけふゝ常磐
の形見あるらめ

かへし

色かへて獨殘れるときは木ゝいつをまつと
か人の見るらむ

ある人さまかへて仁和寺の奥なる所に住むと聞き
てまかりて尋ねけれバあからさまに京ゝと聞きて
歸りにけり其後人道はしてかくなん參りたりしと
申したる返事ゝ

たちよりて柴の煙のあはれさをいかゞおも
ひし冬の山ざと

かへし

山ざとに心ゝふかくすみながら柴のけぶり

の立かへりにし

此歌もそへられたりける

惜からぬ身をすてやらでふるほどに長き闇
にや又迷ひなむ

かへし

世をすてぬ心のうちに闇てめて迷はんこと
ゝ君ひとりかゝ

またしき人々あまたありけれバおなじ心に誰も御
らんぜよとつかはしたりける返事に又

なべて皆はれせぬ闇のかなしさを君おるべ
せよ光見ゆやと

又かへし

思ふともいかにしてかゝまるべせん教ふる
道にいらゞこそあらめ

後の世の事無下に思はずしもなしと見えける人の
もとへいひ遣はしける

世の中に心あり明の人ゝみなかくて開にゝ
まよはぬものを

かへし

世をそむく心ばかりゝあり明のつきせぬ闇
ゝ君にはるけむ

ある所の女房世をのがれて西山に住と聞て尋れけ

れゞ住あらしたるさまして人の影もせざりけりあ
たりの人にかくと申しおきたりけるを聞ていひ送
りける

鹽馴し苫屋もあれてうき波による方もなき
あまと知らずや

がへし

苫の屋に波立よらぬけしきにてあまり住う
きほど見えみけり

待賢門院中納言の局世をそむきて小倉山のふもと
に住み侍りける頃まかりたりけるにことがらまこ
とに幽に哀なりけり風のけしきさへことに悲しか

りけれべかきつけゝる

山おろを嵐の音のはげしきをいつならひける君がすみかぞ

哀なるすみかなとひにまかりたりけるに此うたを見てかきつけゝる　同院兵衛局

うき世をべあらしの風にさそはれて家を出ぬる栖とぞ見る

小倉をすてゝ高野のふもとにあまのと申す山にすまれけりおなじ院の帥の局都の外のすみかとひ申さてへいかゞとてわけおはしたりけるありがたくなん踊るさに粉川へまゐられけるに御山よりいて

あひけるをまろべせよとありけれべ具し申して粉川へ參りたりけりかゝるついでへいまへあるまじきことなり吹上見んといふ事具せられたりける人々申出て吹上へおはしけり道より大雨風ふきて興なくなりにけりさりとてへとて吹上に行つきたりかゝれども見所なきやうにて社にこしかきをゐて思ふにも似ざりけり能因が苗代水にせきくだせとよみていひ傳へられたる物をと思ひて社にかきつけゝる

あまくだる名を吹上の神ならべ雲晴れのきて光あらはせ

なはしろにせきくだされし天の川とむるも

神の心なるべし

かく書きたりけれバやがて西の風吹かはりて忽

雲はれてうら〳〵と日なりにけり末の代なれど

心ざしいたりぬる事にハまゝるしあらたなる事か

人々申しつゝ信起して吹上若浦思ふやうに見て

歸られにけり

待賢門院の女房堀川の局のもとよりいひ送られけ

る

此世にてかたらひおかん郭公死出の山路の

ゝるべともなれ

かへし

時鳥なく〳〵こそいかたらはめ死出の山路

に君しかゝらバ

天王寺にまゐりけるに雨のふりけれバ江口と申す

所に宿をかりけるにかさゞりけれバ

世の中を厭ふまでこそかたからめ假のやど

りををしむ君哉

かへし

家を出る人としきけバかりの宿に心とむな

と思ふばかりぞ

ある人世をのがれて北山寺にこもりゐたりと聞て

暮れまかりたちけるに月あかゝりけれゞ

世をすてゝ谷底にそむ人見よと嶺の木のまをいづる月かげ

ある宮ばらにつけつかへ侍りける女房世をそむきて都はなれて遠くまからむと思ひ立てまゐらせけるにかはりて

悔しくもよしあく君になれそめていとふ都の忍ばれぬべき

題しらず

さらぬだに世のはかなさを思ふ身にぬえなきわたる曙の空

鳥部野を心のうちに分けゆけゞいまきの露に袖ぞそぼつる

いつのよに長きねふりのゆめ覺て驚く事のあらむとすらむ

世の中を夢と見るゝはかなくもなほおどろかぬ我心かな

あき人もあるをおもふよ世の中ゝ睡のうちの夢とこそ知れ

きしかたの見し夜の夢にかはらねゞ今も現の心ちやゝする

事となく今日暮ぬめり明日も又變らずこそ

ゝひま過るかげの
こえぬれば又も此世に歸りこぬ死出の山こ
そ悲しかりけれ
はかなしやあだよ命の露きえて野べに我身
の送りおかれむ
露の玉ゝ消れば又もおく物をたのみもなき
ゝ我身なりけり
あれぱとて頼れぬ哉明日ゝ又昨日と今日ゝ
いはるべければ
秋の色ゝ枯野ながらもあるものを世のはか
なさや朝夕の露

年月をいかで我身におくりけむ昨日の人も
けふゝなき世に

（他人がちゃうなんの心を）

捨やらで命ををふる人ゝ皆千々のこがねを
もてかへるなり

（曉無常を）

つきはてしその入あひのほどなさをこの曉
よ思ひ知りぬる

（暇よよせて常なき事を）

なき人をかすめる空にまがふるゝ道をへだ
つる心なるべし

花の散りだりけるにならびて咲はじめける櫻を見て

ちると見れば又咲花の匂にもおくれ先だつ
ためしありけり

月前述懷

月を見ていづれのとしの秋までかこのよよ
我が契あるらむ

七月十五日月あかゝりけるに舟岡と申す所にて

いかで我てよひの月を身にそへて死出の山
路の人を照さむ

物心細う哀なる折しも庵の枕ちかう虫の音聞えけ

れば

そのをりの蓬がもとの枕よもかくこそ虫の
音にのむづれめ

鳥邊山にてとかくのことしける煙の中より夜更て
出ける月のあはれに見えければ

鳥邊山わしのたか嶺の末ならんけぶりをわ
けていづる月影

諸行無常のこゝろを

はかなくて過にし方を思ふにもいまもさて
その朝顔のつゆ

同行にて侍りける上人例ならぬこと大事に侍りけ